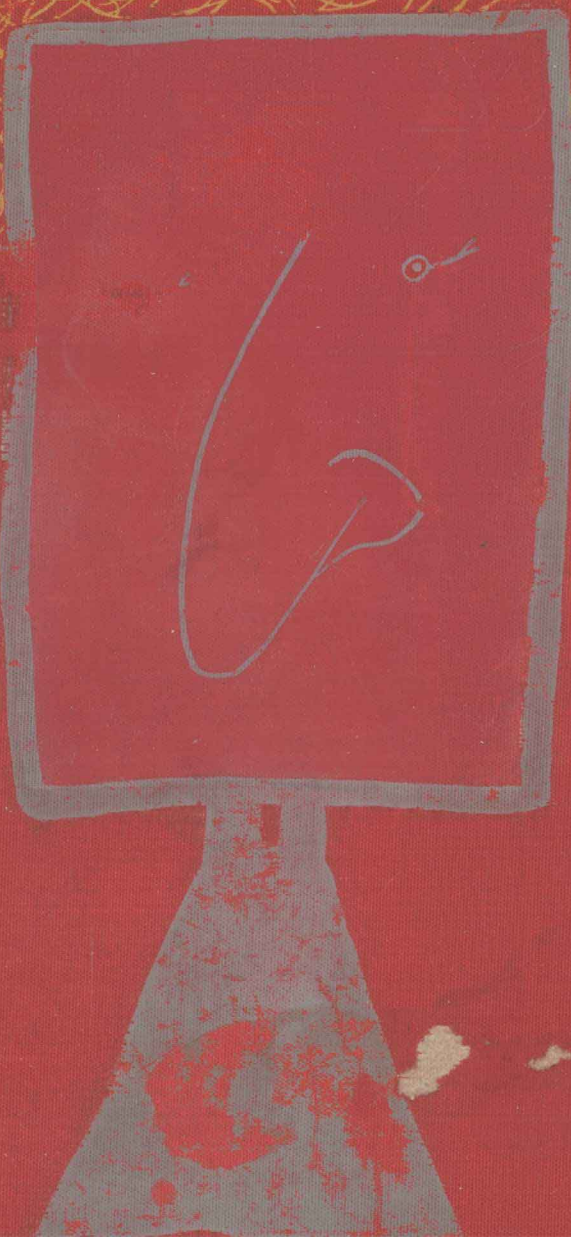


井上ひさし



モッポット師の
後始末

240711

講談社

工 #

ホッ
ッ
ッ

師

A black and white photograph of a man from the chest up. He is wearing a patterned shirt under a light-colored jacket. He is holding a cigarette in his right hand. Large, stylized red Chinese characters are overlaid on the image, partially obscuring the man's face and shirt. The characters appear to be '港女' (Hong Kong Girl) and '米' (Rice).



モッキンポット師^しの^{あとしまつ}後始末

第1刷発行—————昭和47年11月4日

第13刷発行—————昭和49年1月31日

著者—————^{いのうえ}井上ひさし

発行者—————野間省一

発行所—————^{株式}講談社
^{会社}

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03) 945-1111(大代表)

印刷所—————祥文堂印刷

製本所—————黒柳製本

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

©井上ひさし 1972

定価は帯に表示してあります (文2)

目 次

一	モッキンポット師の後始末……………	5
二	聖パウロ学生寮の没落……………	47
三	聖ピーター銀行の破産……………	95
四	逢初一号館の奇蹟……………	137
五	モッキンポット師の三度笠……………	181
	あとがきにかえて……………	222

モツキンポツト師の後始末

一 モッキンポット師の後始末

1

モッキンポット神父は甚だ風采の上らない、目付に陰のある、天狗鼻のフランス人で、ひどく汚らしい人だった。髪の毛は前人未踏のアフリカのジャングルよろしくもじゃもじゃ生え茂り、その一本一本が上に横に斜めに東に西にと勝手気儘な方向に伸び、その上複雑怪奇に絡み合いもつれ合い、本当にライオンの一頭や二頭は潜み隠れていそうな気配だった。マキシドレスとよく似た神父服は、手垢と摩擦によって鏡のようによく光り、向い合ったぼくの姿がおぼろげに写るかと思うぐらいテカテカである。爪の先は真っ黒で、これはどうやら物凄い黴菌の棲息地と思われ、間違つて煎じて飲んで飲んだら前代未聞の腹痛に悩まされそうに不潔この上ない。これで、この神父がS大学文学部仏文科主任教授なのだから人は全く見かけによらぬ。知らないきや西洋乞食と間違えて、金を恵んでやりたくなってしまういそうである。

モッキンポット神父は、ぼくが孤児院の院長から預ってきた紹介状をぶつぶついいながら読

み終ると、天狗鼻から一筋流れ出した水っ漬を神父服の袖口で拭い、妙に頭の脳天から出るような甲高な声で、思いもよらぬ流暢な、しかし、やや下卑た関西弁でいった。

「どや、あんたも紹介状を読みまっか。この紹介状はフランス語で書いてあるんやが、それによると、あんた、だいぶフランス語がいけるそうやないか？」

ぼくが収容されていた孤児院はフランス語を日用語とするカナダケベック州出身の修道士たちによって経営されており、高校生は希望すれば誰でもフランス語を習うことができた。ぼくも柄にもなくABCをやった口だが、白状すれば、フランス語などはどうでもいい方で、敵は本能寺、真の狙いはフランス語の授業の間に出されるビスケットと紅茶のおやつの方にあった。こんな話を聞いたら、ビスケットより軽く見られたとフランス語が怒るだろうが、当時のぼくたちはいつも腹ペコで、もしも自分の軀が喰えるものなら、よろこんで自分を食べたに違いない。

そんなぼくに、「これは一本の鉛筆です」「ここに一人の少年がいます」程度のフランス語ならとにかく、ちゃんとしたフランス語の手紙が読めようとは思えないから、黙ってにやにやしている、モッキンポット神父は、ぼくの語学力を試めそうとでもいうつもりか「*サア、サア*」と紹介状をぼくの鼻っ先でひらひら振った。

ここでまた白状すると、その前の晩、仙台から上野までの汽車の中で、ぼくは何百回、この紹介状を盗み見ようかと思っただしれない。殺人強盗放火を仕出かす度胸はむろんないが、それでも、孤児院在院中は、そこいらへんの悪たれ餓鬼共なら尻尾を巻いて退散するほどの悪事やってのけ、脛に傷持つ軀のぼく、孤児院の院長がモッキンポット神父にぼくを一体どう紹介してくれているのか不安で仕方がなかったからだ。

若しかしたら、孤児院の図書室の、進駐軍キャンプから寄贈された洋書の中から「少年アメリカ史」だの「ディケンズ全集」だの「シェイクスピア全集」だのを一冊ずつズック鞆に隠し盗み出しては、東北大学正門前の古本屋街に売り飛ばし、駅前の闇市で買い込んだ稲荷ずしなどを頼張りながら映画のハシゴをして歩いたあの悪事を、紹介状はすっぱ抜いているのではなからうか。

その外に思い付く悪事といえば、ある冬、余りの寒さに学校へ行くのがいやになり、石鹸の泡を口に含み、その上、念には念を入れて、喉の裏に胡椒を塗り、癩癩と眼炎のダブル仮病を使ったことがある。孤児院中大騒ぎになったが、元眼科医だった修道士がまず眼炎を偽と見破り、元精神医だった修道士が癩癩を仮病だと診断した。修道士の前身は多種多様で、あらゆる職業に互っているから油断も隙もない。「この少年は仮病使いの天才でありますから、よほどの注意が肝腎です」などと紹介状に書かれては、門前払いを喰いかねない。

更にまた思い出す悪事は、ある秋の夜、滅法腹が減ってたまらず、今は自衛隊にいる男と、もうひとり今は詐欺罪で刑務所にいる男と三人、孤児院でやっている養鶏場から鶏を一羽盗み出し、裏の松林で丸焼にして喰ってしまった一件。これも事は簡単に露見した。というのほもとともと鶏の数が少なかった上に、養鶏係の修道士に少女趣味の奇癖があって、鶏の一羽一羽に一羽残らず、「聖マリア」「聖テレジア」「聖マルガリタ」「聖ユリアナ」「聖カタリナ」「聖ルチア」「聖ヘドビス」「聖スコラスチカ」「聖フランチェスカ」「聖ナントカ」「聖カントカ」と、カトリック者なら敬愛してやまぬ尊き聖女たちの名前が付けてあったのだ。そして、不運な事にぼくたちが平らげた一羽こそ、毎朝、神の子ならぬ玉子を生む「聖マリア」なる名前の修道士自慢の一羽。「聖母様が食べられてしまった」「聖母様が食べられてしまった」とその修道

士はべそをかいて歩き、その後、ぼくらには一言も口をきいてはくれなかった。どうせ何かの大祝日には鶏の頸を捻って喰ってしまうのだからそう騒ぐにも当るまいと内心思ったが、なにはともあれ、御母マリアを火焙りにしたのはまずかった。

悪事はまだまだある。ぼくらの孤児院では、中学を卒業すると大抵の子は、信者縁者の伝を求めて、時計屋に奉公に上ったり、鉄工場や自動車修理工場に住み込んだりして孤児院を巣立って行くのだが、そば屋やラーメン屋やお菓子屋に行く子が圧倒的に多かった。矢張り皆、ひもじかったとみえる。それはとにかく、学校の成績がまあまあ人並みで、もう少し勉強したいと望めば孤児院から高校に上ることもできた。高校生になると、本館を出て、別棟の木工場の二階の「高校部屋」で寝起きするわけだが、ぼくらが高校三年、高校部屋のボスになったとき、五人の新入りが入室して来た。

上は一国の首相から下は乞食の親方まで、ちよいと偉くなると、なんとなく勿体ぶりたくなるのは人間の通弊で、ぼくら高校部屋のボスもその例外ではない。誰が発案したのか忘れたが、この五人の新入りに、何か特別の儀式を授けようということになった。

消灯を待ちかねてさっそく有志が四方に散り、御聖堂からはきんきらきんのミサの式服、食堂からは菓罐を五個、木工場からは鋸、車庫からは懐中電灯を手に入れた。準備が整うと、全員で、本館の修道士たちに聞えよがしの大声で「御母マリア、身も心も、永遠に、捧げまつる。この憂き世を、しばし避けて、身も心も委ねまつる——」と就寝時の聖歌を大斉唱。それから五人の新入りを部屋の真中に立たせ、裸になれと命令し、きんきらきんのミサの式服をまとった司祭役のぼくが、懐中電灯の光を頼りに、ベッドの布団の下に隠しておいた「夫婦生活」のページをめくって、エロ小説の一節を、おごそかな調子で朗読した。しかも、主人公

と女主人公の名前を、聖ヨゼフと聖マリアに読みかえて――。

「……すると、ヨゼフは息を荒くしてマリアにいった。『そうだ、そうだ、それでいいのだ。うん、いい。マリア、この頃はお前もだいぶ上手になった。……おっと外れるよ。そうそう。……それそれ。段々よくなってきたぜ』マリアも思わず『わたしやもう、いっそ、死にそうだ』とよがり声を洩らしヨゼフにしがみついた」

いきなり丸裸にされた上、暗闇の中からエロ小説の一節が聞えてくるから、これはどうなっているのかと、仰天していた五人も、朗説が蜿蜒と続くにつれ、なんだ、儀式というのはエロ小説の朗読会かと油断しはじめた。そして、尚も聞くうちに、なんとなく妖しい気分が襲われ、鼻息はおのずと荒くなり、それぞれの股間は雲をよび、雨をよび、一物は天を指して隆々と屹立する気配。

ここですばと電灯をつけ、股間隆々の不逞の連中をとちめた。

「お前たちはカトリック信者である。とすれば、聖母マリアの処女懐胎を信じているはずである。聖ヨゼフと聖母マリアは表向きは夫婦でも、その私生活に性生活は一切なかったということも信じていなくてはならない。にもかかわらず、その隆々の屹立は何事であるか。あつてはならぬことを聞いて、股間のものを屹立させたのは、とりもなおさず、聖ヨゼフと聖母マリアとの間に夫婦生活があったと考えている何よりも動かぬ証拠である。罪のつぐないに、『アヴェ・マリア』を唱えながら、隆々の屹立物に薬罐を引っかけぶら下げて廊下を往復して来い。廊下から帰って来た後も未だ屹立させている奴がいたら、鋸でちょん切るぞよ」

五人は隆々の屹立物に薬罐をぶら下げ、べそをかきながら、「めでたし聖寵みちみてるマリア、主、御身と共にまします。御身は女のうちに祝せられ、またご胎内のおん子イエズスも

祝せられたもう。天主の御母聖マリア、罪人なるわれらのために、今も臨終の時も祈りたまえ」と口々に唱え、廊下をどたばた歩いた。

中には早々と萎えて薬罐をがちゃんと廊下に落す者もあり、ぼくらは高見の見物、大いに笑ったが、あまり大声で笑いすぎ、笑い声を聞きつけて駆けつけた修道士に見つかってしまった。その後は笑うどころではない、一週間、食事を二食に減らされ、「アベマリア」を日に百回ずつ唱えさせられた。

こんな悪事が紹介状に書いてあったら、前途は暗い。モッキンボット神父は、即座にぼくをこのS大学の教授館から叩き出すに違いない。

孤児院は正式に引き払って来たのだから、今更戻れぬ。となるとぼくは文字通り天涯孤独の孤児になってしまう。しかし、やってしまったことは悔んでも仕方あるまい。その時はその時で牛乳配達でも新聞配達でもやるさ。度胸が妙に据わってきた。モッキンボット神父から紹介状を受け取って読むと、割かしやさしいフランス語でこう書いてあった。

モッキンボット神父様尊下。小松君を御紹介申し上げます。同封しました高校の内申書を御高覧いただければ明らかなように、同君の成績は常に上の部。フランス語もよく解し、何より、熱心なるカトリック信者であることは小生が保証いたします。必ず将来、日本のカトリック界に寄与するに足るひとかどの人物に成長する筈であると信じております。

何卒、S大学文学部仏文科に無試験入学をお許し下さいますようお願い申し上げます。

尚、同君の授業料は当教区の信者一同がきんぎん贖金によって負担いたし、大学事務局へ直送いたしますので、事務手続万端よろしく御高配下さいますよう。

又、同君の両親はすでに死亡し、さしたる縁者もなければ、下宿代その他捻出不可能です。カトリック学生のための寮にでもお入れいただきたく、早急の御配慮を賜りますようあわせて願ひ奉ります。

終りに、同君は好青年なるも、若干、輕佻浮薄なるところなきにしもあらず、学問上の御指導もさることながら、靈的指導もひとつよろしくお願い申し上げます。

神の御旨が天に行わるるがごとく、地上にも行われんことを。

仙台郊外光ヶ丘天使園長 小マルセル^{ブチ}修道士

なんだ、これなら別にどうということもない。あれこれ、思い悩んで損をした。ほっとして紹介状をモッキンボット神父に返すと、神父がいった。

「それぐらい読めれば上出来や。内容もわかりまっか？」

「……だいたい、わかります」

「なお上出来や。けどな、トレビエンは発音違いや。トレビアンが正しい」

「修道士の先生はトレビエンと発音してました」

とぼくが不服を唱えると、神父は舌打ちをし、

「カナダ人の発音は田舎くさくて困ったもんや。あんた、そのカナダ訛^{なまり}を直すのにたっぷり一年はかかりまっせ。わても、日本語を最初に関西で習いましてな、この始末や。わてもあんたも、最初の先生の選び方に失敗したのと違いまっか？」

ビエンとビアンの違いぐらいだっていいじゃないかと、ぼくはすこしむっとした。

ビエンと発音すれば鼻炎になるわけじゃなし、ぼくにとっては大恩人の、カナダ人修道士を

こき下すことはなからう。しかし、今後はこの神父が頼みの綱だと思い直し、ぼくはやたらにここにこしながら、

「ほんとうにそう思います。これから神父様のもとで徹底的に発音を直します」といった。

2

モッキンボット神父の口利きで、ぼくはその日のうちに、四谷二丁目のB放送の裏にある「聖パウロ学生寮」に入寮したが、これがまことに怪しげな寮で、大体建物が言語道断の代物である。

正面から見るとちゃんと建っているように見えるが、真横から眺めると南側に十度は傾いている。南側は崖で、崖の下は真言宗の寺の墓地である。震度三程度の地震に見舞われたらひとたまりもあるまい。もんどり打って墓地に転げ落ちそうで、薄気味が悪い。一階と二階は同じ造作で、北側に幅三尺の廊下があり南側にずらり六畳の部屋が並んでいる。建物全体が傾いているのだから、親のなすこと子もならうで、部屋も総体に南に向って傾斜している。不安定でならない。後で実験してみたが、部屋の北側、すなわち入口に卵を置くと、卵はころころとひとりでに南側の端まで転がって行った。

リングを転がしても同じ結果が出た。野球のボールでやったら、ボールはおそろしいほどの速度で部屋を横切り南側の壁にぶつかった。それだから夜、寝るときも警戒して、できるだけ北側の入口近くに布団を敷くことにした。しかし、朝、目を覚すと、軀はどういうわけか南側の壁に衝突している。壁がなかったら、崖下の墓地に墜落して、毎朝、ずいぶん人死ひとじにや重傷者が出たに違いない。

寮の中を案内してくれたのは寮長の土田という東大医学部の学生だが、寮をひと廻りするとぼくは土田に進言した。

「南側はすぐ崖だから無理でしょうが、せめて、寮の東南と西南の方から、丸太でつかい棒をしたらどうでしょう」

すると土田は頷いて、

「去年の秋まではつかい棒がしてあったんです」

「じゃどうしていまは無いんです？」

「冬の間に外して、細く割って食堂のストープにくべて皆であつたまりました」

「建物が崖の下へ転げ落ちるとは思わなかったんですか」

すると土田は澄して、

「天主様の御加護があるから大丈夫でしょう。それにピサの斜塔だつて一三五〇年からずつと傾いたままです。しかも、毎年〇・八ミリずつ傾斜を増しているそうです。この城が傾きだしたのは、戦争中の爆撃以後だそうですから、まだせいぜい十年も経っていません。とにかく、ぼくらがここに住んでいる間は大丈夫ですよ。大丈夫だと思ひましょう」

この傾いた寮をピサの斜塔になぞらえて「城」とは悪い洒落である。土田は今、東大付属病院の内科医に出世している。当時、土田と一緒に入寮していた連中は、何かと土田を重宝して、軀の具合がおかしいと診察してもらっているようだが、ぼくは真平である。土田の事だ、君は胃癌の末期だが、まあ、大丈夫でしょう、いや、大丈夫だと思ひましょう、などといった澄ますつもりに相違ない。そんなお医者に安心してかかれたものではない。

寮費は一月五百五十円だった。今から十五年前の金額にしてもこれは安い。孤児院の院長か

らお餞別に五千円貰っていたので、思い切って六カ月分どんとまとめて払ったら、寮の傾いて
いるのには全く動じなかった土田が目をまるくして、

「いいんですか、そんなに払って？ 現金の払い戻しは一切しませんよ。それに、これは大きな声でいわれると困りますが、寮長のほくでさえ、数日前に、一昨年おととしの十一月分を払ったばかりです。ひどいになると、入寮した月に一回払っただけで、あとは知らん顔——という奴もいるんですよ」

それならそうと金を出す前にいってくればいいのに。男が一度出した金を今更ひっこめるわけにはいかない。

「いいです、構いません」

とぼくはいったが、内心では、大いに惜しかった。

あてがわれた部屋に入って、チッキの荷物をほどき、布団を干し、机の上に本を並べているうちに昼になった。土田の部屋に、

「昼飯を喰いに食堂へ行きませんか」

と声をかけると土田は左手に水の入ったコップを持ち、右手にコップペパンを掴みながら出て来て、

「この寮シャトルじゃ昼飯は出ませんよ」

といった。

「五百五十円は、二食付で、という意味です。昼飯は喰うも喰わぬも各人の勝手です」

勝手といわれても喰わなきゃ死にそうである。仕方がないから、近くのそば屋へ行って、もりそばの大をたのむと、こっそり胸算用を始めた。孤児院から貰った五千円は汽車賃と駅弁で